

生きていくための「死者の書」

「エジプトの死者の書」の“心臓を秤ではかる章”では、真理の女神マアトの羽根（真実の羽根）と死者の心臓がそれぞれ秤にかけられました。

肉体を失った意識は外界の刺激から離れることによって穏やかにになり、そのとき、もっとも根源的なものに触れることができると信じられたチベットでは、「死者の書」によって、死者解脱へと導こうとしました。死に逝く人に対して僧侶が読経するだけでなく、死後も死者の魂が迷いの世界に再び輪廻しないよう、49日間にわたって唱えられ、解脱の道を示しました。

「外への息が途絶えると、虚空のように赫々として空である存在本来のすがた（法性）が現れる」から、「その本体を覚り、その覚った状態に留まるべきである」と説き、「死は誰にでも起こることである」から、「この世の生に執着や希求を起こしてはならない。執着や希求を起こしたとしても、この世に留まることは不可能である」「執着してはならない。貪り求めてはならない」と諭しました。解脱を妨げるのは、この世の執着や貪欲で、それは人々を思い煩わせるもとでもあります。出家した男性僧に対しては、女性の死体が朽ちていく様を描いた図（九相図）を観想（九相観）させるという修行があったといわれます。

これら二つの「死者の書」は、死が単なる終わりではないこと、死と生あるいは死者と生者とが死後も関わり続けていることを物語っているだけでなく、生きていく人々に「生き方」を指し示してもいいと考えられます。

『人間臨終図鑑』

近年、人間の死に方をまとめた山田風太郎は、『人間臨終図鑑』を著しました。上巻は1986年に、下巻は87年に徳間書店から出版されています。同書は、享年別に世に知られた900人ほどの生と死が事典のようにまとめられていて、上巻の扉には「この門に入る者一切の望みを捨てよ」（ダンテ『神曲、地獄篇』）、下巻には「一たび生を受け滅せぬもののあるべきか」（幸若舞『敦盛』）が掲げられ、山田の死生観が垣間見られます。

「十代で死んだ人々」から始まるこの図鑑は、その冒頭ごとに死を語る文が掲げられています。たとえば「知らず、生まれ、死ぬる人、いずかたより来りて、いずかたへか去る。鴨長明『方丈記』」（「十代で死んだ人々」）、「死をはじめて想う。それを青春という。山田風太郎」（「二十代で死んだ人々」）、「同じ夜に何千人死のうと、人はただひとり死んでゆく。山田風太郎」（三十二歳で死んだ人々）等々。

15歳で火刑となった「八百屋お七」から121歳を生ききった「泉重千代」までの、短い人生も長い人生も、山田は淡々と描き、それに自分の想いを添えています。いのちは、生まれ、そして死に行く。それは当然のことではありますが、同書で記されたその様々な死の、それぞれの生は、読者に「死ぬ」ということ、「自分の死」を意識してなお、その意識された「死」とともに、生きていく「いのち」に向き合う契機を与えているようです。

また、一つひとつの死が、それぞれの死の背景（生き方の背景）を写すとも読めます。同時に礎となったイエス、出家遊行の途

上で下痢と腹痛に苦しんで死んでいった釈迦、あるいは悲惨な最期だったルノワールやモディリアニの死が、この人々の生涯や生や生き方を否定し、損なうということもありません。それら人々の生き方は、後の人々の道標になっていることすらあります。それは、死が生を前提にしているからでしょう。

おわりに際して

「願わくば 花の下にて 春死なん その望月の 如月の頃」と詠んだ西行。そんな穏やかな死を迎えたいと思う人は多いでしょう。加賀彦彦は『科学と宗教と死』（集英社新書、2012）の中で、生きていくことは「恵み」であると語りました。そして、死んだら4年前に亡くなった妻と天国で再会できるかもしれないと期待し、また、輪廻は死への恐怖をやわらげるものと捉えています。若い時より心理学の観点から人と死の関係を見てきた加賀は、老年になって、人の死は心理学だけではどうしても捉えきれないことに気付いたといいます。彼は50歳にして受洗し、キリスト教徒となりました。信仰が人を生かすということも語っています。

当然、このような死生観に対して、「死んだら終わり」という考え方があります。しかし、人が生きて死ぬという事実に対して、これまで見たような人々が抱いてきた死者とのつながりや死者を想う生者とのかわり、死の後のことを想う生き様、多くの宗教の先達が死に際して教え諭したことがらに生きていく勇氣のようなもの、喜びを見出したいと思うのです。

岸本英夫の『死をみつめる心』をはじめ、多くの人々が「闘病日記」を著しました。斉藤茂太は『死を覚え』で最後まで力の限り生き、成長していった人たちの生きようを見ると、我々は大いに刺激を受ける。闘病記や看病記は、私たちが『死を学ぶ』『生を学ぶ』尊い糧であろう。『茂太さんの死の準備』二見書房、1990、32頁）と述べています。死を意識することが生を意識することであるのなら、私たちは、私の死だけではなく、他の人々の死をも考慮することができるでしょう。それは、私たちが個々のいのちとしてだけ生きていくというのではなく、大きないのちという流れの中にいる、多くのいのちに生かされていることを感じるということではないかと思うのです。斉藤のいう「死を覚える」ことによって、「量の生命」から「質の生命」へと、いのちに対する価値観を転換させる（31頁）ことなのかもしれません。そして、死を覚えることによって、人は精神的人格的向上や転換を、死ぬ直前まで可能としていくのでしょうか。

死をこの世への出直しとみる天理教では、生き通しの魂が身体を親神から借りてこの世に返ってきます。

新しい着物を着て、（中略）いつの間にかやられれます。汚れますと洗濯をせねばなりません。少しの汚れはすぐに落ちますが、大層汚れますと、力にかけて揉んだりたたいたりせねば落ちません。すれば、その着物は弱ります。（中略）（着られぬようになると）新しい着物に着替えねばならないのであります。（山田太右衛門「出直しの理」『本部員教話抄』）

昭和41年、山口康貞さん（那覇分教会2代会長）は、「いま出直せば、百年祭に間に合わせて頂ける」（道友社編『出直し』2004、62～64頁）と楽しみをもって出直されたといいます。